

1. 当四半期決算に関する定性的情報

(1) 経営成績に関する説明

当第1四半期連結累計期間におけるわが国経済は、世界経済の不確実性等による先行き不透明な状況の中、企業収益や雇用・所得環境は底堅さを維持し、全体の景況感も底堅く推移いたしました。当社海外グループの事業エリアであるアジア経済も、先行きの不確実性等ある中、景気は若干減速しつつも安定した推移を続けました。

このような経済状況のもと、当社グループは持続的な成長の実現に向け、「コア事業である男性事業の維持・拡大」「女性分野のさらなる強化」「インドネシアを中核にした海外事業の強化」に取り組みました。

当第1四半期の連結売上高は、21,966百万円(前年同期比1.6%減)となりました。主として、海外子会社が概ね好調に推移したものの、国内における減収をカバーしきれなかったことによるものであります。

営業利益は、2,573百万円(同34.5%減)となりました。これは主として、国内の減収や一般管理費の増加によるものであります。その結果、経常利益は2,829百万円(同32.9%減)、親会社株主に帰属する四半期純利益は1,721百万円(同37.9%減)となりました。

セグメントの業績は次のとおりであります。(売上高は外部顧客への売上高を記載しております。)

日本における売上高は12,868百万円(10.2%減)となりました。これは主として、男性事業の「ギャツビー」ブランドにおける天候不順に伴う夏シーズン品の苦戦と、インバウンド需要の落ち込みによる女性事業の「ピフェスタ」ブランドと「バリアリペア」ブランドの減収によるものであります。利益面においては、主として売上拡大を目指したマーケティング費用(販売促進費・広告宣伝費)の投下と、減収の影響により、営業利益は1,239百万円(同52.1%減)となりました。

インドネシアにおける売上高は4,489百万円(同2.0%減)となりました。実質増収でありましたが、円高による円換算額の減少によるものであります。利益面においては、一般管理費の増加等により、営業利益は366百万円(同31.4%減)となりました。

海外その他における売上高は4,608百万円(同35.5%増)となりました。これは主として、各社概ね好調に推移したことと、前連結会計年度末より連結対象に加えたACGI社の業績が寄与したことによるものであります。利益面においては、主として増収効果により、営業利益は968百万円(同19.8%増)となりました。

(2) 財政状態に関する説明

(資産、負債及び純資産の状況)

当第1四半期連結会計期間末の資産合計は、有形固定資産が増加したこと等により96,219百万円となり、前連結会計年度末に比べ2,817百万円増加いたしました。負債合計は、流動負債のその他に含まれる未払金が増加したこと等により21,256百万円となり、前連結会計年度末に比べ3,664百万円増加いたしました。また、純資産合計は、自己株式を取得したこと等により74,963百万円となり、前連結会計年度末に比べ846百万円減少し、自己資本比率は71.6%となりました。

(キャッシュ・フローの状況)

当第1四半期連結累計期間における現金及び現金同等物(以下「資金」という。)は、前連結会計年度末に比べ2,895百万円減少し、当第1四半期連結会計期間末には19,884百万円となりました。

当第1四半期連結累計期間における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

<営業活動によるキャッシュ・フロー>

営業活動の結果得られた資金は1,055百万円となりました。これは主に、税金等調整前四半期純利益2,830百万円および減価償却費1,038百万円などによる増加と、未払金の減少額1,299百万円および法人税等の支払額854百万円などによる減少であります。

<投資活動によるキャッシュ・フロー>

投資活動の結果使用した資金は877百万円となりました。これは主に、有形固定資産の取得による支出438百万円および無形固定資産の取得による支出329百万円などによる減少であります。

<財務活動によるキャッシュ・フロー>

財務活動の結果使用した資金は3,163百万円となりました。これは主に、自己株式の取得による支出1,500百万円および配当金の支払額1,357百万円などによる減少であります。

(3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明

連結業績予想につきましては、2019年5月14日に公表いたしました連結業績予想の変更はありません。